

生徒が自ら育てた野菜をPR

府立とりかい高等支援学校

大阪府立とりかい高等支援学校(松村高志校長)の「食とみどり科」の職業学科2年生6人が昨年11月18日、高槻阪急地下の野菜売り場で、自ら栽培した「なにわの伝統野菜」の「難波葱」と「田辺大根」の対面販売を行った。同売り場での生徒による対面販売は、7月の「鳥飼茄子」に続き2回目で、生徒たちは手書きの説明資料を示しながら熱心に呼び込みを行い、来店者の関心を誘っていた。

平成25年設立の同校には職業教育に重点を置いた職業学科があり、その内の一つ「食とみどり科」では、作物の栽培実習と収穫物の販売・加工など「食」に関わる実習を通じて、社会的自立と就労を目指している。

学校設立の翌年から取組んでいるのが地域特産で「なにわの伝統野菜」にも認証されている「鳥飼茄子」。その栽培は難しく、生徒たちは生育不良や病害虫被害に悪戦苦闘しながらも技術の向上に努め、2年前からは、同じ伝統野菜である「難波葱」と「田辺大根」の栽培にも取り組んでいる。

「鳥飼茄子」については、毎年、摂津市が主催する農産物物品評会に出品しており、栽培技術向上への努力の甲斐もあって、今年は悲願であった最高賞の摂津市長賞を受賞。この受賞を契機に、野菜の流通業者から引き合いがあり、高槻阪急への販路開拓につながった。

今回のような販売実習も、

「日々の野菜の世話や防除作業は大変だが、できた野菜を自分で販売するのは面白いです」と話す生徒もいるなど、貴重な体験となっているようだ。

生徒を指導する小川卓治教諭は、「支援学校として、農業と福祉、企業との連携活動を軸に、特色ある伝統野菜の生産や魅力発信になればとの思いもあり、今後は栽培する品目も



熱心に説明する生徒達

増やしていきたい」と抱負を語る。(光崎)

イチジク産地の高齢化対策に スマート農業等講習会

農業会議と府南河内農と緑の総合事務所は昨年11月8日、羽曳野市にある(地独)大阪府立環境農林水産総合研究所で、いちじくスマート農業等講習会を開催した。

農業の現場では、全国的に農家の高齢化や労働力不足等が課題となっているが、こうした課題を解消する取り組みとしてスマート農業技術の導入が進められており、大阪府では昨年より果樹分野でも実証実験が進められている。

講習会では、同事務所の山口果樹振興総括よりイチジク栽培で活用できる防除技術を中心に説明。イチジク栽培農家ら18人が参加した。

スマート農業の活用により期待できる効果として、農作業における省力化及び軽労働力化、栽培技術力の継承、新規就農者の技術習得の早期化等があると説明。特に高齢化が進み、後継者のいない農家も多い果樹の生



研究所内のイチジクほ場で実演して説明

産現場で産地規模を維持していくためには、担い手の規模拡大、軽作業化による営農の持続化、多様な人材の確保・育成が必要であり、これらの達成に向けてスマート農業が有効であると述べた。

府内で先行してスマート農業の実証を行っている分野では、農薬散布ドローンや運搬ロボット、草刈りロボット、環境監視装置などが活躍している状況。

この日は、今年6月より導入しているモモ栽培のクビアカツヤカミキリの防除ロボットが、イチジクの生産現場でも活



(沼田)

用可能として、研究所内の試験ほ場でデモ散布を行った。

同事務所は、「導入にあたっては、高コストであることや、操作習熟の難易度、走行に基盤整備が必要であることなど課題はあるが、可能な範囲から導入が進めば」と期待を寄せる。

この他、滋賀県内のイチジク産地で収穫期の降雨による水膨れや果実腐敗対策として導入されている雨よけ施設について情報提供を行った。